

夏目漱石という誰もが知っている小説家があります。彼はもともと旧制の高等学校の先生、大学の先生でした。それが38歳の時から小説を書き始め、なくなるわずか10年余りの期間に、あのたくさんの小説を書き、文学論を書き、随筆を書き、講演をし（これも書いたものです）ているのです。どうしてこんなに書くことがあったのだろう、と驚きます。一般的に言えば、書くことはとても面倒なことです。たとえ短い文章であっても、書くとなれば、たいへんです。自分の中の何らかの思いを書こうとすると文章を書くことは簡単なことではありません。それをどうしてあんなに次から次へと書けたんだ、と思います。なぜ書くのか、なぜ書き続けたのか、いろいろとその理由を想像します。書きたいことがある、自分の中にあるものを表現したい、言い表したい、という思い。もやもやとしているものに形を与えたい。書くことで、もっと考えたい、書くことで癒されたい。動機は様々にあったと思います。ただそれだけでなく根本のところ、これを誰かに語りたい、伝えたい、表現したい、という思いがあったと思います。その誰がはっきりしているときもはっきりしていない時もあると思います。大事なことは届ける相手がいる、ということではないかと思ひます。

パウロという人も、短い期間にいくつかの手紙を書いた人です。わずか3～4年の間にわたしたちが今手にしている新約聖書の中のパウロの書簡を書いています。手紙と言っても、たとえばローマの信徒への手紙のようにもう書物と言った方がいいようなものも含まれています。現代とは、書く環境も大きく違う時代に、誰から頼まれたわけでもないのに、パウロはよくこれだけのものを書いてくれた、と思わないわけにはいかない。

パウロはなぜ、これほど手紙を書いたのか。やはりそういう疑問が沸き起こってきます。パウロが手紙を書いた。それはどうしても伝えたいことがあった、ということです。そして、どうしても伝えたい相手がいた、ということです。

伝えたいこと、それはパウロにとって、自分の気持ちとか、自分の感情とか、自分の心持ち、ということではなく、自分が受けたもの、自分に与えられたもの、それを伝えたい、それを手渡したかった。それは小説とか、文学とは違う面です。受けたものがあるのです。伝えたい、手渡したい相手がいた、という

ことです。

パウロは自分に与えられたものに衝撃を受けていました。誕生日プレゼント一つだって、相手の気持ちが伝わってきたときには、とてもうれしいものです。しかし、それは衝撃とはまた違うものです。パウロは神から与えられたもののまえて、衝撃を受けていました。目が眩むようなインパクトを受けていた。そしてそれを伝えたいと思ったのです。それをあの人にも、この人にも手渡したいと思った。その相手がいた、だから手紙を書いたのです。

すばらしい小説を読んだ、大きな感動と喜びを受けた、それを誰かにできるなら語りたい。大好きなミュージシャンの演奏を聞きに行った。その感動、そのインパクトを誰かに語りたい。そういうものがわたしたちにはある。そこが基点です。そこが語ること書くことの根っこにあるのです。

先ほど朗読された今日の聖書箇所には、パウロの説教が記されていました。これは使徒言行録に記されているパウロの最初の説教です。パウロが伝道の旅で滞在したピンディア州のアンティオキアの町で安息日に会堂に入り、求められて話をしたのです。なにか、会衆のために励ましのお言葉があれば、と言われて語ったのが、説教なのです。

安息日に会堂で話を求められ、語った話。それはパウロにとって、イエス・キリストの福音以外のものではありえなかった。この説教は、書いたものではなかったかもしれませんが。しかしいずれにせよ、パウロにとっての手紙の基となるものです。あの受けたものを伝える、ということの原型にあるものです。

パウロはまず、神の民の歴史を語り始めます。先祖の選び、エジプトでの生活、そしてそこからの導きだし、荒れ野での40年にわたる旅路、そして約束の地カナンへの相続、そして士師時代のこと、最初の王サウルのこと、次いでダビデ王が与えられたこと、パウロはそれを一気に語り、「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです」と語ります。ダビデから一気にイエス・キリストに話は飛ぶのです。まるで三段跳びのような跳躍です。しかしここにパウロがこの説教で語ろうとしていることの中身がよく表れています。この説教で、パウロはイスラエルの歴史を事細かく語ることがしたいわけではない。イスラエルの歴史を神は導き、その時々には救いの約束をお与えくださった。アブラハムにも、エジプトにいた民にも、荒れ野を旅する民にも。そしてダビデ王にも。神はイスラエルの民に約束を与え続けてくださる神だったのです。その約束の結実、実現がイエス・キリスト

の誕生なのだ、ということをパウロは語るのです。言ってみれば、パウロは、ここに至るまでの神の導きを「約束」という言葉で要約するのです。神はその時々約束を与えて、人々がその約束を信じていき、歩むよう促され、その約束を果たしてこられた。そして神はそれらの約束の根っこにある最も大事な約束、わたしたちを救う、という約束をイエス・キリストをわたしたちに与えることで果たし実現された、それがこの説教の骨子です。イエス・キリストは、唐突に、突然のようにわたしたちに与えられたのではない。イスラエルの長い歩みの中で、神の約束の実現として、時至ってやってこられた。そしてパウロは主イエスがピラトや死刑を求めるものによって十字架につけられ、死に、墓に葬られたこと、けれども神は、主イエスを墓の中から復活させてくださったことを一気に語るのです。

ダビデは神に仕えた信仰者だった。しかし、言うまでもなく、時来たり死んで朽ち果てていった。だがキリストは十字架で死んで、神によって復活させられたのだ。

神はキリストの十字架において、わたしたちを背負い、その罪を赦し、わたしたちを義としてくださった。復活のいのちによって生きるものとしてくださった。義としてくださった、ということは神が、イエス・キリストの十字架と復活のゆえに、神にたいして罪びとであるわたしを、いいよ、もう一度、わたしと共に生きよう、と言ってくくださることです。わたしはあなたを受け入れ、受けとめているよ、と言ってくくださることです。旧約聖書の人々は、ずっと礼拝で自分たちの罪を贖うために、赦していただくために、犠牲の動物を幕屋で、神殿で献げていたのです。焼き尽くす献げものです。そして、律法を一所懸命守ることに努めた。だが、それでは神に義しとはされなかった。しかしキリストが十字架にかかって、動物の犠牲はもう一切必要もなく、意味もなくなった。律法をまもれば義とされるという呪縛からも解放される。これがパウロがこの説教で手渡したいこと、自分が受け、伝えたいことでした。

神の独り子が犠牲としてささげられた。しかし、もし神の救いの業が十字架で終わりなら、仮に罪赦されたとしても、救い主がいなくなったこの世界に我々だけが生き延びて、どれほどの意味があるのか、と言った人がいます。たとえば、船に乗っていて遭難し、海に放り込まれたのだが、たった一つしかない救命具をわたしに渡してくれた人がいた。わたしはそれによって助かった。だがその人は死んでしまい、わたしは、死の海に漂っているだけ。ということになった。もしそうなら、死の海に漂うわたしは、助かったのだが、途方に暮れるだけ。キリストの犠牲の愛に感謝しつつも、一つ的美談で終わってしまう。

だが、神の約束の実現は十字架で終わるのではなく、死人の中から、キリストを甦らせたもうた、というところに突き進んでいく。パウロはキリストの復活こそが神のこれまでイスラエルの民に与えてこられた約束の成就だ、と語るのです。言ってみれば、十字架によって罪担われたわたしたちは、復活したキリストによって、海から上がり、大地に立って、キリストの新しいいのちを受けて、キリストと共に新しい道を歩いていく、それが約束の実現だ、というのです。わたしたちにはこの救いが与えられた。あなたもそれを受けて、歩み出してほしい、それがパウロのメッセージです。

この説教には、後にパウロが手紙で書き記すことの柱となることがしっかりと出てきます。言い換えれば、パウロはこのとき自分が受けたものを、漠然と受け止めていたのではなく、輪郭のはっきりしたものとして、言葉で形をすでに示していたということです。やがて彼はこの救いをもっと丁寧に、もっと詳しく、もっと豊かに語ります。しかしここには、パウロの手紙で示した救い、福音が骨格として明確に表れているのです。

わたしが神さまから与えられているものはどんなものなのか。わたしが受け取っているキリストの救いはどんなものなのか、パウロはそれを言葉にしようとした人です。ペトロもそうでした。ステファノもそうでした。それは、切実な動機があつてことでした。この救いを、この福音を伝えたい、ということからでした。結果、わたしたちはこの人たちを通して、2000年たった今も、福音を受け取ることができるのです。まず、福音を受けましょう。大きな衝撃、感動、喜びを福音から与えられ、それを全身で受け止める。本当に受け止めたとき、それを伝えたい、語りたい、という思いへと促されていくのではないでしょうか。